



高名なお坊さん(その14)

白隠禅師(1685年～1768年) 日本臨済宗の再編に貢献した画僧

臨済宗中興の祖。駿河国(静岡県)に生まれる。15歳で出家したのち諸師を遍歴、信州飯山の正受老人より禅の真髓を示され、悟りを開く。

各地を行脚した後に故郷に戻り、50年近くにわたって松蔭寺の住職を務めました。松蔭寺に住持してからは、各地を巡って教えを広めるかたわら、著述、書画など、精力的な創作活動を行った。その自由闊達な書画は、特に有名。請われて各地で講義を行い、終生にわたり、様々な方法を駆使して法を説きました。

人の往来が激しい東海道の沿道で、時代に即応した禅を広めた僧として知られています。松蔭寺には遷化の翌年に完成した白隠禅師坐像があり、虎視牛行と言われる鋭さと厳しさを感じることができます。



白隠禅師



白隠慧鶴「半身達磨図」



「白隠禅師坐像」
(沼津市指定文化財)



奥が臨済宗宗祖・臨済義玄禅師、
手前が日本臨済宗中興祖・
白隠慧鶴禅師

祖父母世代ばかりで、戦争体験も含めて、有り難い話を沢山聞かせて貰っていました。そういえば、ここ最近、戦争体験の話が全く聞かれません。戦争体験者が少なくなつたからでしょう。戦争体験の話し、次世代に語り継いでいかなければなりません。それが、平和な時代に生きる、私たちの使命でしょう。



1月23日早朝の雪景色

私が住職を継いだ二十八年前、戦争を体験された方が、まだ多くいらつしました。法事にお参りしても、周りは

「戦争が終わって、安穩がおとずれますように」と祈り続けることしか出来ない無力さを感じますが、しかしそれでも安穩を願ひ祈り続けなくてはなりません。

「『あいさつ』のページ、何を語ろうか、いつも悩みます。一昨年(令和三年版)はコロナについて、昨年(令和四年版)は御手植松について。今年(令和五年版)は、ロシアとウクライナの戦争について語りました。

住職レター

善教寺法要案内パンフレット、いつもは十一月の終わり頃には、翌年版が完成しておりました。しかし令和五年版は、今年になってようやく完成。遅くなつて申し訳ありません。